



〈史料翻訳〉『東中欧からのドイツ人追放の記録』
第1 巻 (3 分冊) 「オーダー・ナイセ線以東の諸地
域からのドイツ系住民の追放」より、オーバーシュ
レーゼンに関する証言 (2)

衣笠, 太朗

(Citation)

近代, 130:61-82

(Issue Date)

2025-09

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100497759>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100497759>



〈史料翻訳〉『東中欧からのドイツ人追放の記録』 第1巻（3分冊）「オーダー・ナイセ線以東の 諸地域からのドイツ系住民の追放」より、 オーバーシュレーゲンに関する証言（2）

衣 笠 太 朗

Die Vertreibung der deutschen Bevölkerung aus den Gebieten östlich der Oder-Neisse, T. 1-3, (Dokumentation der Vertreibung der Deutschen aus Ost-Mitteleuropa, in Verbindung mit Adolf Diestelkamp... [et al.]; bearbeitet von Theodor Schieder, Hrsg. vom Bundesministerium für Vertriebene, Flüchtlinge und Kriegsgeschädigte, Bd. I), Unveränderter Nachdruck der Ausgabe von 1954, München: Deutscher Taschenbuch Verlag, 1984.

〈解説〉

本稿は、『近代』第129号に掲載された同名記事（1）^①に続く史料翻訳である。ここでは、『東中欧からのドイツ人追放の記録』（以下、『追放の記録』）という5巻本の史料集・証言集のうち、第1巻「オーダー・ナイセ線以東の諸地域からのドイツ系住民の追放」（初版は1954年刊行）に収録されているオーバーシュレーゲンに関する証言の一部を訳出する。

「ドイツ人の避難と追放 *Flucht und Vertreibung der Deutschen*」とは、第二次世界大戦末期から戦後にかけての中東欧の諸地域から、1200万人以上のドイツ系住民が避難した、もしくは強制的に移住させられた出来事を指す用語である。『追放の記録』の史料的偏向をめぐる諸問題とその史料的価値、ならびに

オーバーシュレージエンに関する基礎情報についてはシリーズを通じて同一であるため、(1)を参照してもらいたい。

ここでの翻訳対象は、オーバーシュレージエンにおける1945年4月の「避難」、およびその後の時期の「追放」に関する6つの証言である。「避難」はソ連軍の到来に伴ってドイツ系住民が大挙して前線から遠い場所へと移動した出来事を指し、「追放」はソ連の影響下においてポーランド行政機関によって実施された強制移動措置を意味する。証言⑤は1945年4月の「避難」の状況を示しており、それに続く証言⑥～⑪は、1945年9月以降の「追放」に関する史料である。この「追放」は同年8月2日締結のポツダム協定以後に実施されたものであり、(1)で訳出したポツダム協定以前に実行された「野蛮な追放」(「無法な追放」とも)とは国際政治と国際法の上での位置づけが異なる。この協定では、「秩序立った人道的な方法」という条件付きではあるが、ドイツ系住民の国外移動が認められたのである⁽²⁾。

(1)の繰り返しとなってでも読者に注意を促したいのは、『追放の記録』という証言集に内在する問題である。その証言を歴史的事実の把握のために用いるには厳密な史料批判が必要であり、その意味で証言の中で記されていることを「ありのままの事実」として受け取ることはできない。『追放の記録』をめぐる史料批判の方法および史料批判のためにポーランド側の史料を活用するなどした分析について、私は論文を順次発表している段階であり、そちらも併せて目を通すと理解がより深まるだろう⁽³⁾。

前稿においては、こうした史料翻訳の利用可能性として論文執筆の準備作業や旧ドイツ東部領土研究の底上げという方向性を示したが、それにとどまらず高等教育機関の講義や演習での史料の活用を行えば、歴史学のための実践的教育として有用であると考えている。とりわけ私が専門とするドイツ史や中東欧史のような外国史に関しては、学部生向け講義・演習において一次史料を用いた読解の訓練が難しいという事情もあるため、史料批判に関して十分な配慮を

行うという制約の下ではあるものの、有益な教材となりえる。私自身もすでに、この『追放の記録』にとどまらない、ドイツ語とポーランド語からの翻訳史料を用いた授業実践に取り組んでいる。

当然ながら、訳文の稚拙さ、誤訳、事実誤認のような翻訳にあたっての問題は、すべて訳者の責任である。

〈注記〉

- ・各証言の冒頭には、証言についての情報が付されているが、それは〔出典情報〕と〔資料情報〕の2つの部分から成っている。〔出典情報〕は、『追放の記録』においてその証言が収録されている箇所の巻・部・章・節・頁を翻訳して示したものである。〔資料情報〕は、『追放の記録』の各証言冒頭に示されている情報（資料番号、証言の概要、証言の採録状況、資料タイトル）を翻訳して提示したものである。
- ・訳文中の丸括弧（ ）は原文そのまま、角括弧〔 〕は訳者による補足を示す。地名に付される補足は現在のポーランド名である。
- ・イタリックになっている文章は、『追放の記録』の編纂者による補足説明である。

〈訳文〉

証言⑤

〔出典情報〕『追放の記録』第1巻「オーダー・ナイセ線以東の諸地域からのドイツ系住民の追放」第1分冊・第1部「赤軍からの避難」第3章「シュレージエンでの避難の体験」第1節「オーダー川以東の地域からシュレージエン周縁山地、ズデーテン地方、ザクセンへのドイツ系住民の追放：迫りくる赤軍から

の避難」(S. 411-413)

[資料情報] No. 108 オーバーシュレージエンのコーゼル郡アイヒハーゲン出身の退職教師ヴァルデマール・ビルクホーフェンによる報告。

オリジナル、1951年4月10日。

コーゼル近郊のオーダー川渡河地点での戦闘、避難、帰還の経緯⁽⁴⁾。

私の最後の勤務地はアイヒハーゲン [ポボルシュフ] だった。アイヒハーゲンはコーゼル郡内の町であり、コーゼル [コジレ] 市からオベルン [オポーレ]、ブリーグ [ブジェク] を経てプレスラウ [ヴロツワフ] へと続く舗装道路沿いの郡庁所在地から北へ9kmのところに位置する。アイヒハーゲンの3km北にはメフニッツ [メフニツァ] がある。この2つの町はオーダー川の左岸にあり、川から約1～2kmの位置にある。オーダー川の右岸においては、アイヒハーゲンがオーダーハイン [ヤヌシュコヴィツェ] の向かい側にある一方で、メフニッツはオーダータール [ズジェショヴィツェ] の向かい側にあり、後者はシュトレリッツ郡に属している。

アイヒハーゲンへと流れ込むオーダー川には水門と幅の広いニードルダムがあり、メフニッツにはオーダー川を越えるための渡し場がある。オーダー川沿いには、アイヒハーゲンからメフニッツまでオークの森が広がっている。オーク林の手前のところのオーダー川右岸にはシュルツ造船所があり、多くの建築資材が積まれていた。

1945年1月23日、オーク林の森林管理官は、オーダー川の右岸にロシア軍が現れたと郡長に通報した。この森林管理官はアイヒハーゲンとメフニッツの地区指導者だった。彼は夕方6時頃に村へやってきて、アイヒハーゲンとメフニッツの2つの村は8時までに避難しなければならないとの郡長命令が出されたと伝えた。グロース・ノイキルヒ [ポルスカ・ツェレキェフ] 方面へ、そこからズデーテン大管区方面へ移動することとされた。

グロース・ノイキルヒは私たちの村から見て真南に位置していたため、ロシア軍が直接侵攻してくることは明らかだった。そのため、誰もその方向へ移動しようとはしなかったのだ。

地区農民指導者が移動を指揮することになった。事前準備は、誰によっても、一切行われていなかった。

地区指導者は、4日前の1945年1月19日に郡長での会議で、市長、部局長、校長たちに、オーダー川左岸は危険にさらされておらず、現状を維持すべきだと説明していた。ロシア軍はオーダー川を渡河することではなく、その対策は万全であるのであり、それとは異なることを言う者は、即座に銃殺する[ということであった]。だが学校は直ちに閉鎖すべきではないのかと、個人的には大きな疑念を抱いた。その結果、誰も移動を開始しようとはしなかった。

移動を始めたのはごく少数の人々で、彼らはレオプシュッツ郡とノイシュタット郡の近隣の村々に移った。

私自身は、より遠く離れたアルテンヴァル[コモルノ]に家族を連れて行った。

翌朝の1945年1月24日、私は再び故郷の村に帰還した。

オーダー川の渡河地点は国民突撃隊が警備していた。1945年1月25日、この部隊は、周辺の村から招集された休暇中のドイツ国防軍兵士で編成された歩兵部隊に交代した。

その朝、先に言及した造船所の所有者であるシュルツの妻が泣きながら私のところにやってきて、ロシア兵が彼女の夫を撃ち殺したと告げた。彼女は、ロシア兵が屠殺した鶏を、一晩中、羽をむしっては焼くという作業を強いられた。朝方、彼女はなんとか逃げ出したのである。

ロシア軍は、建築資材を用いてオーダー川に2つの橋を架け始めた。私はこのことを大尉に報告した。2階建ての学校の三角窓からは、ロシア軍の動きが肉眼で確認できた。大尉は、1944年に空襲対策のためにメフニッツ近郊に配備

されていた高射砲部隊にすぐに連絡を取り、部隊はすぐに橋の建設現場を砲撃した。午後、歩兵がオーダー川に向かって進軍した。激しい戦闘が繰り広げられた。手榴弾や銃弾が村に飛び込み、人々はようやく事態の深刻さを認識した。一部はより離れたところにある村に逃れたが、多くは留まった。橋の建設現場は絶えず対空砲火にさらされていたため、ロシア軍は橋の建設を 500～600 メートルほど離れた水門の方に移し、森に隠れて防御態勢を固めた。

1945 年 1 月 26 日の朝、数人の戦死者が私の学校に運び込まれた。戦闘は一日中続いた。

状況が危険になったため、私はレオブシュッツ郡に転居したが、毎週村に戻っては 2 日間を過ごすようにした。

1945 年 1 月 27 日の日没の時刻、ロシア軍は歩兵だけでアイヒハーゲン村とメフニッツ村に侵入した。アイヒハーゲンには水門の堰を越えて、メフニッツにはオーダー川を渡って侵入した。

ここでは村まで侵入することはできず、森に隣接するリッターフェーレとコロニーという村の区画にとどまった。そこで、彼らは若い女性や少女たちを、ジャガイモの皮をむくという名目で、スミカラ家の家屋に追い込んだ。そこで彼女たちは強姦されたのだ。少女たちの一部は窓から逃げ出すことに成功した。胸の服が裂けたまま、取り乱した様子で村に戻ってきた。

アイヒハーゲンでは、彼らはまず、ドイツ兵がいるかどうかを尋ねた。そして、時計やブーツ、靴、食べ物を要求した。彼らは、いくつかの納屋に火を放ち、その火は一晩中燃え続けた。

1945 年 1 月 28 日の午後、我が国防軍が反撃を開始した。ロシア軍は撃退されたが、その前にさらに多くの納屋に火をつけた。私の学校も、砲弾の直撃を受けてかなり破壊されてしまった。

1945 年 2 月 3 日、同じことが繰り返され、1945 年 2 月 4 日、ロシア軍は再び退却させられた。その後、火災による攻撃や妨害を目的とする攻撃が何度も繰

り返された。戦闘は夜通し続いた。村に残っていた男たちは夜中に塹壕を掘り、村の防備を固めた。村には突撃砲も配備されていた。

1945年3月14日、私は再びアイヒハーゲンまでたどり着いたが、村に入ることは許されなかった。入口は親衛隊の警備部隊によって封鎖されていた。住民は、少数の高齢者以外はバスで連れ去られた。

その後数日間、アイヒハーゲンとメフニッツの2つの村で激しい戦闘が繰り返された。アイヒハーゲンは60%、メフニッツは80%が破壊された。

ロシア軍はノイシュタット郡まで進軍した。

アイヒハーゲンでは、水を汲みに行った女性が射殺された。

農民のフェルディナント・ガルバスは地下室に隠れていたが、残虐な方法で殺害された。

農民のヨハン・Kは家から引きずり出され、道路の側溝の中で横にさせられ、首に銃弾を撃ち込まれた。地下室にいた彼の69歳の母親は強姦された。

66歳のアンナ・マイヒャー氏は銃の銃床で殴打された。

強姦された女性や少女は多数に上った。

メフニッツでも同様の事態が起こった。

農民のボラーク、息子をつれたキオルティカが、防空壕で射殺された状態で発見された。アウグスト・トーマスとヴァレンティン・ムロツェクは、道端で射殺された状態で放置されていた。アグネス・グシェジスタは、道路の側溝で射殺された状態で横たわっていた。修道院では、修道院長がベッドで血の海に沈んで死亡していた。ここに避難していたベルリンからの2人の高齢男性もベッドの上で死体となっていた。

メフニッツでは30人以上が殺害された。

ノイシュタット郡の村落であるドイッチュ・ラッセルヴィッツ [ラツワヴィツェ・シロンスケ] で、ロシア軍は包囲網を敷いた。

包囲網の中にいた避難民の群れは、ロシア軍によって自宅へと送り返された。

良馬は奪われ、その代わりに劣悪な馬が与えられた。一部の人々は、放し飼いにされていた馬を捕らえ、それを使って自宅へ戻ることができた。

アイヒハーゲンに戻った男性の中から 1945 年 4 月 7 日に 20 人がロシアに連行され、そのうち戻ってきたのは 1 人だけだった。(中略)

私は家族とともにレオブシュッツ郡に避難し、そこからエンス川沿いのシュタイアーまで移送された。

5 月 8 日、アメリカ軍がそこにやってきた。アメリカ軍は町の一部をロシア軍に明け渡し、ロシア軍は私たち全員を故郷に送り返した。私たちは 26 日間、何も食わずに旅をし、特に夜間はロシア軍から絶えず嫌がらせを受けた。彼らは、好きなものをすべて奪い、時計、イヤリング、指輪などを奪った。指輪は、耳や指から無理やり引き抜いた。

毎日、子どもや老人が亡くなった。列車が停車すると、死体は線路の脇に埋葬された。私たちは飢えと衰弱の中でハイデブレック [ケンジェジン] に到着し、そこから 16km の道のりを徒歩でアイヒハーゲンまで移動した。

これに続いて、ポーランド人の行動とその後の追放についての見解が記されている。

証言⑥

[出典情報] 第 1 巻・第 2 分冊・第 3 部「オーダー・ナイセ以东の諸地域からのドイツ系住民の追放と強制移住」第 2 章「ボツダム協定締結 (1945 年 8 月 2 日) 以後の 1945 年における追放作戦」第 1 節「シュレージエンからの追放」(S. 708-709)

[資料情報] No. 307 オーバーシュレージエンのレオブシュッツ [グウプチエ] 出身の匿名司祭の報告。

故郷レオブシュッツで交わされた書簡の活字化、1950 年。

レオブシュッツからの労働不能な男性と子連れ女性全員の追放 (1945 年 9 月)⁽⁵⁾。

1945年9月26日早朝5時、ドイツ人に対する警察の手入れが始まった。ポーランド民警が家屋へ押し入り、すべてのドイツ人を街頭へと追い出した。いくらかの財産を持っていくだけの猶予と機会を与えられたのは、わずかな者だけだった。全員が広場へ追い立てて集められ、そこからある者はトラックで、またある者は徒歩でマルシュケとツィルガーの収容所へ連行された。男たちは、一晚中雨のなか歩かなければならなかった。翌日、収容者は、都市司令部とポーランド民警によって個々の労働能力に基づいて選別された。子連れの女性、若い女性、子どものいない女性、労働不能な男性などの基準が存在した。スローガンは次のようなものであった。「子連れの女性と老人はドイツへ送還、労働可能な男性、子どものいない女性、若い女性はここで労働投入」。収容所は3000人の人々でいっぱいであった。

1945年9月27日午後5時に、移送が決定した人々が鉄道に乗せられた。その中にはフランシスコ会の神父であるルートヴィヒ・ボグダンスキの姿もあった。彼はレオブシュッツのフランシスコ会修道院の元修道院長であった。レオブシュッツ出身のカントール・ボルスツキが移送のリーダーに決まった。70人から80人が貨車に家畜のようにすし詰めになされたあと、夜8時に移送が始まった。ポーランド民警は移送の監視役として参加していた。誰もどこへ送られるのか知らなかった。1945年9月28日に列車はオーバーシュレージエンのナイセ〔ニイサ〕に到着し、4日間死の行程を走り続けた。食料を持ってきていなかったし、誰も食事を提供してくれなかったの、人々がパンに飢えて叫んでいた。だがパンにはありつけなかった。貨車がポーランド民警によって開放されれば、飢えた人々は外へ出ることができ、近くの農場に生えているカブやジャガイモを探すことができた。その際に多くの人、特に高齢の女性がゴム製のムチでポーランド民警によって殴られた。ペーター・ルートヴィヒは、最初の7人の死者をナイセ要塞の防塁の下に埋葬した。彼らは文字通り飢え死にしたのである。

我々はさらに移動を続けた。夜にポーランド民警が貨車に押し入ってきて、女たちからハンドバッグを奪い、それを引っ掻き回し、そこから落ちた物を強奪していった。男たちからは金銭が奪われた。強姦するために、何度も女性を貨車から引きずり出そうとした。列車が駅でないところに停車し、民警が貨車の扉を開けたとき、カブやジャガイモを見つけるために、飢えた人々が草原へ崩れ落ちてきた。それぞれの駅で死者が運び出され、鉄道用築堤のそばや防塁の穴、何もない草原に埋められた。ゲルリッツに到着する直前に、故郷から追放された人々は、ロシア人やポーランド民警によってもう一度徹底的に略奪された。列車が1945年10月10日に到着した、ドイツに入ってから最初の駅であるザクセンのレーバウには、ドイツの行政機関によって最初の食事が用意されていた。各々にクヴァルクのかかった4等分のパンと小麦粉スープが配られた。レーバウから、移送列車はザクセンのツィッタウへ向かい、そこからさらにニーダーオーダーヴィッツ収容所へ移送された。

15日にわたる移送の間に飢餓と消耗により88人が亡くなった。さらにその後、280人が、追放の結果として、ツィッタウとニーダーオーダーヴィッツに到着して数週間で死亡した。

証言⑦

[出典情報] 第3部・第3章「1946年における強制移住作戦」第3節「シュレージェンからの追放」(S. 781-782)

[資料情報] No. 338 オーバーシュレージェンのナイセ郡ボルケンドルフ [ブルグラビツェ] 出身の農民パウル・フィーヴェガーの体験報告。

オリジナル、1952年10月3日、4ページ、一部を活字化。

1945年6月から1946年6月までのナイセ郡における追放⁽⁶⁾。

報告の最初の部分で、著者はロシア兵の到来と2週間の収容所生活における

ロシア占領当局による自身の処遇について叙述している。

1945年5月20日にはすでにポーランド民警がボルケンドルフに拠点を構えており、略奪と横暴な逮捕によって村を恐怖に陥れはじめていた。住民はひどく恐怖し、この時間が早く過ぎ去るように願った。とはいえ、これらすべては始まりにすぎなかった。1945年5月28日の朝にすべての村民が、1時間以内に10kgの荷物を持って村の広場に集まるように要求された。誰一人として出てこなかったの、7時にポーランド民警が家々を回り、人々を足蹴や銃床によって路上へ追い出した。私は家から出て、高台に行って、すべてを観察した。私は1914年から18年の戦争に参加し、1916年にはヴェルダンとソンムの戦いを体験したが、このような非人間的行為を目撃したことはなかった。彼らは銃を撃ち、ムチで追い立てた。人々や子どもが叫んでいる音だけが聞こえてきた。皆が集まったとき、人々は家畜のようにギールスドルフ [ギェラウチツェ]、ツィーゲンハルス [グウホワジィ] を越えて、ナイセへと追い立てられた。私自身はそうした目にあわずに済んだ。しかし私が信頼のおける人物から知りえたところによると、それは恐ろしいものであった。ナイセにはこれらの人々の世話をする者はおらず、そこからたいの者が戻ってきた。この間に、村のほぼすべての家屋と農場がポーランド人の所有になった。ドイツ人はもはや、コーヒーカップひとつすら所有することを許されなかった。

1945年7月5日にドイツ人は再び集められて追い立てられ、今度は直接ナイセへ送られた。[しかし] 数日後に大半がそこから再び戻ってきた。なぜなら誰もどこへ行くのか知らなかったからである。そののち収穫期がやってきた。ドイツ人は労働を強いられたのだが、大部分のポーランド人のもとでは腹いっぱい食べられなかった。そこには十分な食料があったにもかかわらず、である。例えば私の農場には100 ツェントナー⁽⁷⁾のジャガイモがあったが、ドイツ人には何も与えられなかった。ポーランド人がシュナップスを作るために燃やさなかった物は腐った。妻は1946年6月の追放まで実家にいて、ポーランド人に労働を

強要されていたため、郷里でひもじい思いをしていた。

男たちは皆連れて行かれたので、私は一人で暮らしていた。最初の追放の後には誰も家にやって来なかった。1946年1月、そこに居合わせた者だけが信じられるような事柄を経験した。1946年1月23日と24日にポーランド人は、グロース・クンツェンドルフ [スワヴニョヴィツェ]、ボルケンドルフ、ビショフスヴァルデ [ビスクプフ]、マルカースドルフ [マルコヴィツェ]、アルテヴァルデ [スタリィラス]、ノイヴァルデ [ノヴィラス]、ルートヴィヒスドルフ [ハルビェリン]、オッパースドルフ [ヴィエシュビエンツィツェ]、ギールスドルフの市町村から約5000人のドイツ人を集めて追い立てた。ドイッチュ・ヴェツテ [ノヴィ・シフィエントウフ] 駅で彼らはそれぞれの家畜用貨車に80人から100人ずつ詰め込まれた。私はそこに家族がいると思っていたので、そこへ向かった。1946年2月24日の夜に我々はドチツチュ・ヴェツテ駅へと急かされた。人々は扉をできる限り閉じておいた。1両の貨車に、4人のポーランド人警察官が随員としてついてきた。多くの人々が食べ物や立派な衣類を持ってくるやいなや、彼らはすぐにその貨車に押し入り、人々から略奪を行った。列車は頻繁にナイセ、カメンツ [カミエニェツ・ゾンプコビツキ]、ザガン [ジェガン] で停車を繰り返しながら、リンデローデ [リピンキ・ウジツキエ] に向かった。そこまで2日かかった。列車はリンデローデで停車し、話によるとロシア人はこれ以上の移送を許可しなかったらしい。そこに8日以上滞在している間に、かなり寒くなってきた。木の板が白い霜によって覆われた。もはや多くの人が食べ物を持っておらず、疲れ果てて病気にかかり、亡くなった。その後、移送列車が再び戻ってきて、駅から駅へ、2、3日かけて移動した。列車が止まったとき、駅以外の場所で、しばしば軌道の間に、遺体が運び出された。1946年2月12日、我々はナイセに舞い戻っていた。それでもポーランド人はほとんどドイツ人に手を貸さなかった。私はその後1946年3月にニーダーシュレージエンにたどり着き、そこから強制的に移住させられた。

証言⑧

[出典情報] 証言⑦と同じ (S. 782-783)

[資料情報] オーバーシュレージエンのナイセ郡デュルアンスドルフ [ヤルノウトゥッフ] 出身のハインリヒ・クリストの体験報告。

オリジナル、1951年9月21日。

1946年1月から2月までの強制移住措置における組織性の欠如。ロシア軍の占領による区域境界線の封鎖⁽⁸⁾。

わずかな持ち物だけを持って我々は故郷のデュルアンスドルフから追放され、そのあと幾度も追い立てられたあと、ナースドルフ [ナジェユフ] に宿泊した。1946年1月24日の深夜24時、突如としてポーランド人の叫び声が響いた。「外へ出ろ！10分後に外へ！」いくらかの食料とわずかな持ち物を急いでかき集めて、通りで凍えるような寒さの中を集団で追い立てられ、ドイッチュ・ヴェッテまでの15kmの道のりを行進した。ついて行けない者は、近くで馬に乗っていたポーランド人に容赦なく殴られた。「走らなければ、撃つぞ」とポーランド人が妻に向かって叫んだ。子どもと老人も連行された。ドイッチュ・ヴェッテで我々は徹底的に検査され、わずかにしか残っていなかった所持品も奪われた。

夜、列車に乗った。我ら68人の人々と3台の乳母車は、中ほどの家畜用貨車に入れられた。氷のように冷たい床には、横になるスペースはわずかしかなかった。屋根の裂け目から水がしたり落ちてきた。基本的には1日中貨車の中にいた。列車はたいてい夜だけ動いたので、シュレージエンを抜けるのに3日かかった。ザガンから、シュレージエンを越えて、さらにゾーラウ [ジャリイ] を通ってリンデローデへ到着したが、そこの線路上で3週間以上停車したままであった。なぜならロシア側は彼らの [ソ連占領] 地区へ我々を入れたくなかったし、一方のポーランド側も元の場所へ戻すのを嫌がったからであった。

それは、犬以下のみじめな扱いを受けた3週間であった。わずかな旅費はす

ぐになくなった。我々は空腹のために村々で物乞いをした。ポーランド人が我々から施し物を再び奪うかどうかは、定かでなかった。煉瓦や金属板で草原に作った急造のオープンで、我々はふたつのジャガイモを調理した。

毎日毎日、毎晩毎晩、何週間も、飢えや寒さに苦しみ、宿らしきものもなく、手や足は太く腫れ、凍傷を負ったのだ！我々はそのようなみじめな体験をした。妻は何週間も赤痢のようなものにかかったが、それに耐え抜いたことは奇跡であった。毎朝、死人が出た。凍傷になり、餓死したのである。「死者が少なすぎるな」とポーランド人が露骨に言い放った。親族が 20 マルクを支払うと、遺体は墓地に運ばれた。さもないと野原に埋葬された。

列車の編成は、4000 人以上を乗せた 60 両以上の貨車からなる長大なものであった。我々の乗った列車では 186 人もの死者が出ているという情報は、私のところにも届いた。

ひどい吹雪の際、夜中に我々は貨車から雪の中へ追い出された。その後、ポーランド人によって貨車の中が調べ尽くされ、気に入ったものを持って行かれた。幾度も、繰り返し、男も女も乱暴に虐待された。

3 週間後にナイセへの送還が行われた。

証言⑨

[出典情報] 証言⑦と同じ (S. 783-785)

[資料情報] No. 340 オーバーシュレージェンのナイセ郡ボルケンドルフ出身の B. G. の体験報告。

オリジナル、1952 年 10 月 14 日、7 ページ。一部活字化。

ポツダム協定前の追放の試み。ポーランド支配下での苦難。1946 年 1 月の追放移送⁽⁹⁾。

前半部で著者は、赤軍到来前に実施された地元市町村の周辺部への疎開につ

いて、また春耕作のために農民が戻ってきたことや降伏の数日前のズデーテンラントへの避難について叙述している。それに続いて帰還の際の困難、特に女性と少女が、略奪を働くロシア兵によって危険にさらされるという著しい災厄に関しての記述と、ポーランド民警の専横支配による地元村落での苦難の時期についての記述がなされている。

1945年6月28日、朝5時と6時にポーランド人が、家のドアのところで喚きたてた。「2時間以内に全員が学校へ集合！」学校へ行く村民もいたし、高台にある穀物畑に行くものもいた。一日中私は家族や他の人々と一緒に燦々と輝く太陽のもと穀物畑にいたが、夜になると村外の集落へと移動させられた。7月30日に我々は近隣のK村へと立ち退かされた。追放計画は前日に漏れていたのだが、それを受けて林や森に逃げていた者は、ムチで叩かれながら村へ連れ戻された。馬たちが解き放たれて駆け出して、穀物畑をかき分けてチェコ国境めがけて突進し、[最後には] 鳴き声と銃声 [が聞こえた]！私は家族と、近所の村境にある麦畑に身をひそめ、1日を過ごした。低く抑えられたヒューという笛が鳴って、あちこちで草原から頭が上がり、すぐに30人の男女と子どもが森林の空き地に集まった。夜の雷雨が我々を追い散らした。嵐の中、我々は深夜以降に4km離れたチェコに向かった。我々は14日間ヤギ小屋のわらの中で、皮付きのジャガイモを食べながら過ごした。行政からの重い処罰が迫る我々に、本国ドイツ人（Reichsdeutsche）が宿を提供してくれた。我々は忍び足で草原を通って村へ戻り、耐え難い胆嚢の痛みに苛まれ、修道院の療養所を探そうとするまで、昼間は林の中でジプシーのような生活を送った。ポーランド人による嫌がらせが村の人口を激減させた。フランケンシュタイン郡といった、どこか他の地域に逃げるために、それまで全身全霊で所持品や家畜を固守していた高齢の農民がすべてを放棄したことは、私にとって忘れがたい体験となった。私も1945年7月22日に親族Rのところへ逃亡した。8月14日、彼は周辺の村のナチ党員とともに連行された。彼らは「ホルスト・ヴェッセルの歌」[ナチ党

歌」を歌わなければならなかった。ここではゴム製のムチがあちこちで、歌おうとしない男たちに向かって唸りをあげた。たいていの者がナイセのコッホ通りにある収容所で亡くなり、私の親族もそこで9月27日に亡くなった。

恐怖と困窮の中、1年がたった。私は農業労働者としてある農民を手伝っていた。この農場では、11月から1月までの毎週土曜日に、新たな所有者によって略奪が行われた。私が未だに忘れることができないのは、1945年9月1日に20歳の少女 M・K が14時くらいに民警に連行され、交番で散々ひどい目にあったので、彼女はしゃべることができなくなってしまい、母の証言によれば彼女は「身体中があざで」青ではなく、黒くなっていた、ということである。

1946年1月11日朝6時に我々は家を追われ、農家の住居に宿泊した。その住居、牛馬の厩舎には、275人の人間が泊まっていた。それなのにトイレはたった1つしかなかったのである！1946年1月18日朝6時、身を切るような寒さの中、整列させられ、準備されていた収穫用荷台の上に荷物が投げ込まれた。その後、恐ろしい夜を過ごすことになる、扉や窓のない、朽ち果てたフリードリヒ大王の装甲室〔監獄〕のあるナイセへ出発した。深夜までに、4人の村人 R、K、St、P が集められていた。1月19日朝10時に、人々の列は駅に到着し、門道に安置された、布団で覆われた今夜亡くなった人々のそばを通り過ぎた。数えきれないほどの人である！それぞれの貨車に最大で75人も入れられた列車で、4日間森を走り、途中8人の死者が出た。大通りでは21時まで待機し、涙が凍った。その後、この都市の飲食店に振り分けられ、さらに4日後、フィンスターヴァルデ〔スタレツィモヒ〕収容所への更なる移送が行われた。その場所からは、3月に周辺の村への強制移住が行われた。我々はふたたび人間になることができた。

次なる移送は、村民の報告によれば、1946年1月26日にドチツチュ・ヴェツテで行われた。80歳の女性 Kr はベッドから引きはがされ、彼女は一時しのぎの衣類しか持っていくことができなかった。他の者も同様であった。1945年2

月 12 日まで、列車は厳寒のなかで食糧もなしにリンデローデの待避線に停車し続けた。それは、ロシア人が移送列車の受け入れを拒んだので、我々を再び故郷へ送還することとなったためであった。我が村の出身者だけで 12 人が亡くなり、他の村も似たようなものであった。(中略)

これは、村の命運と部分的に関連する個人的な結末であるものの、確かにこの時代を象徴するものでもあった。

この報告の末尾では、最後に殺害された、もしくは連行された人々について言及がなされている。

証言⑩

[出典情報] 証言⑦と同じ (S. 785-787)

[資料情報] No. 341 オーバーシュレージェンのナイセ郡ギールスドルフ出身の農民ハインリヒ・カウフの体験報告。

オリジナル、1953 年 1 月 6 日。

ポーランド民警の容赦ない追放の試み。ナイセ郡における 1946 年 2 月末および 6 月初めの追放に至るまでの、財産を没収されたドイツ人農民に対するポーランド人入植者による処遇⁽¹⁰⁾。

1945 年 6 月 28 日のことであった。私は自分の 70 モルゲン⁽¹¹⁾の農場にいた。当時はまだ 2 頭の馬と 3 頭の子馬に餌を与えて、世話をすることができていた。厩舎からまっすぐ、使用者がここにやってきた。「2 時間以内に、全員が 20kg の手荷物を持ってガストハウスに集合せよ」。私は絶句した。妻は昨晚に、小さな女の子を出産したばかりであった。私はしばらくベッドにいたが、何をすべきか分からなかった。とりあえずブルジツキ市長のところに行った。彼は短くこう言った。「妻は家に留まらせておきなさい。あなたは子どもから離れて暮らすことになります」。それで私は 2 回市長のところに行った。私が再び家に帰ると、

すでにポーランド民警がいた。彼らは我々に向かって叫んだ。「すぐに外へ出る！」 外で私は近所のデューメル夫人を呼んで、馬と車を用意した。我々はベッドとともに妻と子どもを乗せたが、急いでいたので他の子どもに必要な物をすっかり忘れていた。そののち我々は、ボルケンドルフ、グロース・クンツェンドルフ、ギールスドルフからツィーゲンドルフの向こうへと追い立てられる人々の長蛇の列と合流し、ドイッチュ・ヴェッテへ（たどり着いた）。我々はそこで何とかして寝床を探さなければならなかった。そこでドイッチュ・ヴェッテ出身のリーガーという勇ましいドイツ人女性が、憐みから妻を家に招き入れてくれ、そこに彼女は宿泊することができた。我々の荷車はその夜にポーランド人に略奪され、めぼしいものは奪われた。

翌朝、再び出発したのであるが、その際に私は村から持ってきた手押し車に妻を乗せて連れて行った。ひとりのポーランド人女性がやってきて妻からベッドを奪っていったので、我々はある村から進むことができなくなった。そこから監視もされながら、アルト・ヴェッテを越えて、プライラント〔ブシェウエンク〕へ向かった。道中においてポーランド人（隊列全体の監督者）が道端の地雷原に迷い込み、それで我々の中で5人が亡くなった。我々は事故が起こった場所のすぐ後ろにいた。馬はこれ以上進みたがらず、私はそこで向きを変えて、引き返した。そこにはもう別のポーランド人がやってきていて、我々を移送へと追い返したので、再びナイセを目指すこととなった。

我々は夜にナイセに隣接する地域に到着した。私の6人の子どもは荷車に乗っていた。私は一晩中馬の頭をしっかりと離さないようにしなければならなかった。なぜなら大騒ぎになると、ポーランド人は銃撃をしてきたからである。群衆全体が何度も追い立てられ、のろまな者は幾度も殴りつけられた。何人かの男性は人質として選び出された。ここから誰かが逃げ出せば、その男たちが射殺されたのである！妻と子どもは、助産婦の懇願で、近くにあった略奪済みの家の床で眠ることができた。3日目に次のようなことが告知された。すべて

のポケットナイフ、長ナイフ、時計、金銀製品を引き渡すこと。人々は徹底的に調べられた。何かが見つければ、射殺されたのである！

6日目の夜に我々は収容地の外に出ることができた。我々はヴォイツ〔ヴィチツェ〕を越え、オトマハウ〔オトムフフ〕へ連行された。ナイセにおいてポーランド人は我々に橋を使わせなかったので、クライン・ブリーゼン〔ブジェジナ・ポルスカ〕で仮設の橋を渡り、その村で宿舎を見つけた。7月6日、我々は故郷への希望を胸に歩き続けた。我々がギールスドルフの境界をкаろうじて踏み越えたので、我々はポーランド人に目をつけられた。私は耐えがたいほど殴られ、再び進む方向を変えざるを得なかった。我々はビショフスヴァルデの方へ追い立てられた。そこではまたもや移送されるドイツ人の群衆がまとめて追い立てられていたのであり、このように我々は命運を共にしなければならなかった。馬と荷車は連れて行けなくなり、衰弱した妻とまだ小さな子どもたちとともに（その先へと）歩いた。長らく歩き通しだったので、私は子どもたちを代わる代わる担いであげる必要があった。パンはもうひとかけらも残っておらず、死ぬほど疲れてナイセの収容所に到着した。妻は、痛みからもはや足を動かすことができず、そのそばには泣いている我が子がいた。翌朝、監視されながらさらにオトマハウを越えてグラッツ〔クウォツコ〕まで歩いた。我が子たちは、飢えのせいでこれ以上進むことができなかった。だから我々はオトマハウで監視の目を盗んで忌々しい道に別れを告げ、恐怖から地下室に逃げ込んだ。そこで我々は、最悪の事態が過ぎ去るまで、死の恐怖を味わった。それから我々は人里離れた道を行き、再びクライン・ブリーゼンを目指した。そこで我々は、シューファー夫人に快く受け入れられた。シューファー夫人はできるだけ物を我々に与えてくれた。妻がそれ以上歩けないほど衰弱していたので、我々はそこに8日間滞在しなければならなかった。

7月18日に我々は、ヘルマンシュタイン〔ケンプニツァ〕の義姉のところに身を寄せた。妻と子どもは、ヘルマンシュタインの義姉の家に滞在した。7

月 19 日に私はギールスドルフに行き、ポーランド人のもと、自分の農場で働いた。妻と子は来させなかった。そこで私は 8 月 1 日までそのポーランド人のところで働いた。8 月 2 日、そのポーランド人が私をメッツナー・ルードルフの農場に連れて行った。私はそこで 4 週間、食事だけのために働かなければならなかった。それから彼は私をもう一度私の農場に連れて行った。私の農場には 3 組の家族がいて、農場全体を 3 分割して利用していた。そこで私は一生懸命働いた。8 月 8 日、妻子がギールスドルフにやってきたが、食事は自分ひとり分しか与えられなかった。妻は子どもとパンかごを編んだが、そのように彼らは生活のための一時しのぎの品を手に入れる必要があった。私の農場（70 モルゲンが自営地で、40 モルゲンが小作地）においては 800 ツェントナー以上の穀類が脱穀されたが、私は麦芽粉碎機でひいた 6 ツェントナーで耐え忍ばねばならなかった。他の穀類はポーランド人が 3 等分し、売ったり、シュナップスを作ったりした。それに加えて、私は 10 モルゲンのジャガイモと 9 モルゲンのカブを手に入れた。我々はジャガイモを腹いっぱい食べることができた。3 モルゲンのセイヨウアブラナから 1 リットルの油を作ることもした。

1946 年 2 月 26 日、村落全体の追放が再開された。2 月 25 日の深夜にポーランド人がやってきて、他の人たちとともに我々を宿屋へと追い立てた。寝ていた子どもたちも全員が 20 度の寒さの中、灯りもなしに必需品だけで外へ連れ出された。そして我々は寒いホールの中で早朝 6 時まで座って待たされた。その後、ポーランド人のルーカス・ベトナツが我々を帰宅させた。理由は彼の妻が肺炎で倒れたからということであった。彼女を世話する者は、彼以外誰もいなかった。私の妻が彼女の面倒を見ることとなり、家事を行ったが、どの子どもも手元に置いておくことを認めないという条件付きであった。当時 12 歳であった長男のヨーゼフは、翌日すぐに、ランガー・リヒャルトのポーランド人のもとに送られ、2 人の娘、6 歳のマルタと 4 歳のエリザベスはズデーテンラントの知人のもとに引き取られた。妻はその晩、国境を越える時の死の危険のことで、

娘たちを心配した。子どもたちは3月初めまでそこに滞在し、そこでチェコからドイツへと追放された。

1946年6月に立ち退きが行われた。6月9日から10日まで、我々はまったく眠ることができなかった。なぜなら我々の農場を所有するポーランド人が夜、すでに何度も略奪されつくした我々の住まいにやってきて、言葉も発せずに、我々全員が外に出るまで部屋に居座ったからである。この時、立ち退きはすでに始まっていたのである！我々は犬のように村の中へ狩り立てられた。急いで荷車に飛び乗ることができた者はいいい方で、さもなければ追い立てられる野生動物のように走らなければならなかった。ポーランド人市長は、馬にムチを入れながら人々の中へやってきた。2日間収容所で暮らした後、我々は再び検査を受け、その際またもや全員が徹底的に調べられた。まだ価値のあるものを持っていた者は、それを奪われた。それから我々は家畜用貨車に乗せられた。我々は、もう一度平穏を取り戻せると手放しで喜んだ。

6月17日に今の居住地に到着した時、自分たちが再びドイツ人のなかにいることをうまく理解できなかった。

註

- (1) 衣笠太朗「〈史料翻訳〉『東中欧からのドイツ人追放の記録』第1巻（3分冊）「オーダー・ナイセ線以东の諸地域からのドイツ系住民の追放」より、オーバーシュレージエンに関する証言（1）」『近代』（神戸大学近代発行会）、第129号、2025年、55-77頁。
- (2) 茂田宏／小西正樹ほか編『戦後の誕生——テヘラン・ヤルタ・ポツダム会談全議事録』中央公論新社、2022年、569頁；Foreign Relations of the United States: Diplomatic Papers (URL: <https://history.state.gov/historicaldocuments/frus-1945Berlinv02/d1380>)。
- (3) 2025年8月現在での刊行物として、以下のものがある。衣笠太朗「上シレジアにおける「ドイツ人の追放」と民族的選別——戦後ポーランドの国民国家化の試み——」『IGK-Working Paper Series』（16）、2015年；衣笠太朗「1945年1月から7月までの上シレジアにおけるドイツ系住民の移動と選別——「無法な追放」とその構造——」『境界研究』第15号、2025年、1-31頁；衣笠太朗「シレジアにおけるドイツ系住民の「追放」の歴史的前提」『国際文化学研究（神戸大学大学院国際文化学研究科紀要）』、63号、2025年、137-170頁。また、日本語での最重要研究として、川喜田敦子『東欧からのドイツ人の「追放」——20世紀の住民移動の歴史のなかで』（白水社、2019年）も参照のこと。
- (4) *Dokumentation der Vertreibung*, Bd. I/1, Nr. 208, S. 411-413.
- (5) *Dokumentation der Vertreibung*, Bd. I/2, Nr. 307, S. 708-709.
- (6) *Dokumentation der Vertreibung*, Band I/2, Nr. 338, S. 781-782.
- (7) 重量の単位。1ツァントナーは50kgに相当する。
- (8) *Dokumentation der Vertreibung*, Band I/2, Nr. 339, S. 782-783.
- (9) *Dokumentation der Vertreibung*, Band I/2, Nr. 340, S. 783-785.
- (10) *Dokumentation der Vertreibung*, Band I/2, Nr. 341, S. 785-787.
- (11) 面積の単位。1モルゲンは約30アール。